研究報告１　古代北陸道の人面墨書土器について

堀沢　祐一（埋蔵文化財センター所長）

はじめに

筆者は、これまでに越中国での人面墨書土器(以下、人面土器)の特徴等や、古代の諸国における人面土器の出土状況の確認などを行ってきた[1]。2018 年に諸国の様相を調査した際には、古代北陸道での出土事例が増加する傾向がみられた。改めてこの地域での人面土器を集成し、様相や特徴等について、越中国の様相を踏まえながら触れてみたい。本稿は、古代北陸道のうち西から越前国、加賀国、能登国、越中国、越後国を対象とする。ちなみに若狭国と佐渡国では現在のところ人面土器の出土事例は報告されていない。

１　越前国の様相

越前国では、現在のところ高柳遺跡のみから人面土器が 2～3 点出土している。

(1) 高柳遺跡(福井市高柳１丁目)

人面土器は自然流路(SR02)から 2 点(9 世紀頃)出土している。福井県域では初めての出土事例である。SR02 は最大幅約 40m、深さ約 1.4mで、弥生時代後期末以降に形成され 9 世紀頃まで機能していたと考えられている。人面土器は土師器小型甕を使用しており、平底(図 1 の 1)と丸底(図 1 の 2)が各 1 点ある。前者は 4 面の顔が描かれ、色調は赤味がかかる。後者は残存している部分で 2 面の顔が確認できる。色調は肌色から白色に近い。両者の顔の書き手は違うように思える。また、舌や歯を描いており特徴的である。

SR02 の主な出土遺物としては、墨書土器(「中家」「□家か」「大伴」「大万呂」「倉女」「□長か」「加津」「綾生」「半」「本」「吉」「黒」「十」「田」「永か」等)、製塩土器などがあり、墨書土器は 31 点報告されている。

また、図 1 の 3 の土師器の小型甕は、顔が描かれないが丸底器形で、色調が人面土器に使用されている土器と似ている。筆者が私考する顔が描かれない人面土器なのであろうか。これを含めると 3 点になる。

なお、木製品も出土しており、時期比定が難しいようであるが、箸と報告されている木製品があり、古代であれば斎串の可能性がある。なお、曲物の底板や皿、弓、炭化した材もあり、越中国などで木製形代とともに出土する主な木製品と一致する[2]。このことは加賀国や越後国でも同様の傾向がみられる。

本遺跡については、「加津」の墨書土器などから「古代北陸道に関する遺跡で九頭竜川を渡るための渡渉点に関する施設があったもの」と推定されている。

２　加賀国の様相

加賀国では 5 遺跡から 13 点(人面土器の可能がある土器と顔のない人面土器 5 点を含む)が出土する[3]。

(1) 松梨遺跡(小松市松梨町)

自然河道(幅約 17m以上、深さ約 1m)から人面土器片が 5 点出土しており、内 4 点(図 1 の 4～7)が同一個体とされ、2 点以上が確認できる。使用される土器の時期は 9 世紀前葉で、すべて土師器小型甕である。

人面土器以外には、緑釉陶器、墨書土器 63 点（「仁古麿」「牧万呂」「縄万呂」「麿」「口」「井」「上内」「鬼食」「富三」「□子」「中田」「平益」「長一」「酒」と「口」「三」「十十」「廾か」「卅か」「品」「拍か」「東」「山」「珎か」「食」「中」「内」)、転用硯、灯明具や木製品(琴柱状木製品、曲物、折敷、弓、火鑽棒等)などが出土している。

本遺跡について報告書では「8～9 世紀の建物群は不分明ながら豊富な文字資料や庄園の存在の可能性などから松梨はたんなる川筋の通過点ではなく有力な中継地であったことになろうか」と評価している。

(2) 福増カワラケダ遺跡(金沢市福増町南)

川跡(SD10・幅約 6～10m)から人面土器である 1 点(図 1 の 9 と 10)と人面土器の可能性が指摘されているものが 1 点(図 1 の 11)、不明墨書模様が描かれる 1 点(図 1 の 12)がある。また、図 1 の 13 は焼成後に底部穿孔されており、顔がない人面土器と考えられる。すべて土師器小型甕で、時期は 9 世紀前半頃。

SD10 からは、墨書土器(「二」「百力」「汝」「田」「小」「東」)、灯明具の他、木製形代として斎串、人形(約 60 点)、馬形、鳥形か、剣形か、櫓形かが出土し、その他には鬱と考えられる製品に加え、曲物、折敷、焦げた板棒、下駄の歯などがある。報文では、木製形代等と人面土器等の土器祭祀具の出土傾向が異なること

から「木製祭祀具と土器を用いた祭祀行為は直接的には連携しない可能性が高い」と指摘され、本遺跡について「隣接する横江荘遺跡に所在する荘家推定建物に関わる祭祀場(祓所)の可能性がある」としている。

(3)大友E遺跡(金沢市近岡町)

人面土器は2カ所の川跡(市SD02は2点・県SD01は1点)から計3点が出土している。1カ所目は、市SD02で、幅14.2m、深さ1.6mの規模である。人面土器は土師器小型甕(図1の14)と長胴甕(図1の15)を使用し、ともに顔は3面が描かれるようで、書き手は同一と考えられる。時期は9世紀後半が中心。

市SD02からは、緑釉陶器、墨書土器(「秋」「秋木」「大」「門□」「千」「木」「斗」「伝か」「西」「庄」「大□」「□庄□」「田」「火」「真」「依」「訖か」「南請か」)、転用硯、灯明具、木製品などが出土している。木製品の中には、斎串(4点)、人形(1点)、陽物形?(1点)の形代や、曲物、火鑽臼、箸状木製品などが含まれている。

また、市SD02南方約40m離れた調査区では、本溝との関係が指摘されている2条の溝(市SD122、市SD130)が検出されている。前者からは呪符木簡、斎串(1点)、人形(1点)、木皿、折敷、箸などが、後者では人形(2点)、鰤、斎串と考えられる棒状木製品などが出土している。時期は9世紀後半である。

もう1カ所の人面土器の出土地点は、これらの溝から南西方向約150m離れた県SD01(幅約6m、深さ1.1m)で、土師器の小型甕片(図1の16、8〜9世紀)がある。この溝からは墨書土器(「依女」「井」)と木製品として曲物が出土している。本溝の北東方向に位置する川跡からは斎串が1点あり、その他には曲物、付木、火鑽臼、下駄などが出土し、墨書土器(「依」「大」など)、転用硯?もある。時期は8世紀後半とされる。

なお、市SD02の南方約190mに位置する河川跡(市SD3002・幅約12m、深さ約1.7m)から、木製形代として斎串、人形、馬形、鳥形、刀形が確認されており、この他には鰤、曲物、皿、糸巻、弓、下駄、棒状木製品などがある。あわせて1000点を超える墨書土器(「井」「依」「稲依」「大」「案主」「田舎」「馬屋」等)や、転用硯、灯明具、馬歯、獣骨などが出土している。時期は8世紀中葉から10世紀前葉である。人面土器を使用しない祭祀行為が行われていた可能性があり、幾つかの祭祀場を形成していたと考えられる。

本遺跡の性格として、遺跡周辺を含めた比較的広範囲な土地を対象に定期的な(頻繁な)祭祀行為を行っていた農耕・生産に関する公的な管理施設や荘園施設と想定されている。

(4)若松遺跡(金沢市田上町北)

長軸約40㎝、短軸約30㎝のピット(P-F149)から土師器長胴甕(図1の17・8世紀後葉〜9世紀前葉頃)を使用した人面土器がある。出土状況について「掘立柱建物近くのピットから出土した若松遺跡の事例は、竪穴建物内から出土するという東国に近いものと考えられ、北陸では珍しい用いられ方をしている」と指摘されている。古代北陸道では越中国の下佐野遺跡でピットから出土している事例(図2の10)がある。本遺跡の周辺には、古代前半〜中頃に寺院関連の施設または寺院を支える有力氏族の存在が想定されている。

(5)加茂遺跡(津幡町字舟橋・加茂地内)

土師器小型甕を用いた人面土器(図1の18・9世紀中葉)が溝(SD10)から1点出土している。底部が見られないため意図的な穿孔と推定されおり、土器には2面に顔などが描かれている。A面には「非常に柔和な表情で笑みを称えた子供のように見える」と報告されている。B面は男性器の可能性が指摘されている。図1の19は、人面土器の近くから出土した土師器小型甕で底部が欠損するが、ほぼ完形で、人面土器とほぼ同形同サイズであることから、人面土器との関連性が指摘されている。墨書が認められないとすれば、筆者の言う「顔がない人面土器」と考えられる。なお、この調査区では木製形代は出土していないが、SD10とつながると想定されるSD5001から斎串1点と刀形1点出土している。

SD10は、南東から北西方向に敷設された古代北陸道能登路を分断する東西溝で、推定幅14m、深さ約85㎝前後である。また、SD10の南肩部付近では3本の杭列(間隔94㎝)が確認され、渡河に係る施設と考えれている。「道と流路と交わるこの地で何らかの祭祀が行われた可能性が高い」と報告されている。

本遺跡では、人面土器が出土している溝以外に、約8カ所から木製形代が出土している。総点数は斎串21点、人形4点、刀形3点、剣形1点、鏃形1点であるが、各地点から出土している点数は数点である。

井戸や掘立柱建物の柱穴から斎串が1〜2点出土している事例があるが、溝からの出土が多く、SD10の北西方向約240mに位置する北大溝(9世紀代)では人形(1点)、斎串(7点)とともに土師器小型甕(図1の20)が出土しており、「顔のない人面土器」と考えられる。また、墨書土器や挽物の盤などもある。

また、仏堂と推定される礎石建物も確認されており、仏教信仰と道教的信仰が重層していることがわかっている。本遺跡の性格については、田領が駐在する郡役所の関連施設と考えられている。

３　能登国の様相

能登国では３遺跡から６点(人面土器の可能がある土器を２点含む)出土している。

(1)森本Ｃ遺跡(宝達志水町森本)

人面土器(図１の21・8世紀末～10世紀前葉)は河道跡(SD01)から１点出土している。使用する土器は土師器鉢で、いわゆる土製の仏鉢で、あまり人面土器に使用される器種ではない。また、顔は倒置に描かれ、底部に「中山寺」の墨書がある。このような墨書方法は珍しく、使用方法が気にかかる。

SD01は、幅3.2～5.4m、深さ50㎝前後である。SD01からは、確実に形代と考えられる木製品はなく、斎串と推定される箸状、棒状木製品が実測図は各１点(箸状木製品は11点と報告されている)あり、呪符木簡も１点見られる。この他には墨書土器36点が報告されており、その内容は「中山寺」「北寺」「田所家」「川相」「中山」「柿」「□正か」「田上」「前」「西か」である。転用硯、灯明具も出土し、仏鉢も多い。

本遺跡は、奈良時代末～平安時代前期にかけて、諸儀式を執り行ったと考えられる「中山寺」「北寺」、あるいは「田所家」に関わる公的施設が存在したことが想定されている。仏教信仰と道教的信仰の接点の中で人面土器が使用されているのであろうか。

(2)福井ナカミチ遺跡(志賀町福井・福野)

自然流路(SX311・313)から、人面土器が１点と、人面土器と想定される土器が２点ある。３点とも須恵器の杯で、9世紀中～後葉である。加賀、能登両国では唯一の事例である。図１の22は１面顔が描かれている。図１の23は２面墨書が認められ「筆跡は文字というよりは絵画に近く、図１の22と同様に人面が描かれた可能性が高い」とされ、図1の24は「墨書は筆跡から人面墨書の可能性を残す」と報告されている。

SX311・313は、幅5～8.5m、検出面からの深さ45～80㎝で、溝状を呈している。木製形代は琴柱状木製品が１点、斎串と考えられるものが１点あり、その他には曲物などが報告されている。また、墨書土器(「公主」「田□」「主か」)17点が示されており、転用硯、灯明具、製塩土器などもある。

本遺跡は、「旧福野潟に面した寺院が関与し、祭祀を行った施設の一部」と考察されている。

(3)小島西遺跡(七尾市小島町)

人面土器はＤ区の下層３層から２点が出土している。すべて土師器を使用している。図１の25は、４面の顔が描かれる。ＡとＢ面、ＣとＤ面は互いに表情が似ており、両目から頬にかけての墨書による線が特徴的とされている。時期は9世紀前葉である。図２の１と２は人面土器片で同一個体として報告されている。おそらく土師器の長胴甕で、時期は9世紀前半～9世紀第３四半期である。

この地区は木製形代が大量に出土している地区で、斎串566点、人形164点、舟形７点、馬形46点、刀形15点、弓形９点、琴柱形１点、鋤形１点、斧形１点が報告されている。この他に斎串と想定されている芯持ち丸太材で直線性を保つものがあり118点に及ぶ。周辺の調査地区を含めると約1000点にもなる。また、墨書土器、転用硯、製塩土器、付札状、曲物、盤、糸巻、櫛、鹿笛などの木製品、獣骨等がある。

7世紀末～8世紀初頭から祭祀具の使用が開始されたと指摘されており、8世紀後半～9世紀初頭には木製形代を用いた祭祀が行われ、9世紀前半～9世紀第３四半期には人面土器も使用されている。ただし、出土点数の割合から見て、木製形代を主体とする祭祀行為が行われていたと考えられる。

本遺跡については、「祭祀は古代から中世初頭まで、断続的ながら長期にわたって執り行われている。祭祀の規模と継続性から判断して、能登国府あるいは香嶋津に付随する祭祀場であった」と推定されている。

４　越中国の様相

越中国では８遺跡から28点以上が出土している(顔のない人面土器は８点あり、それを含めると36点以上になり、遺跡数は９遺跡になる。)。越中国の人面土器は図２の3～図３の6、12・13に示している。出土点数は北陸道内ではもとより、日本海沿岸諸国でも最多である。越中国については紙幅の関係があるため、堀沢2013、堀沢2024を参照していただきたい。

５　越後国の様相

越後国では３遺跡から４点が出土している。

(1) 浦反甫東遺跡（長岡市島崎）

人面土器片（図３の７）は河川（SD976）から１点出土している。使用する土器は土師器の長胴甕で、時期は９世紀後半～末である。SD976 は幅 30.1m、深さ 1.86mである。SD976 は新旧関係があり、そのほとんどが中近世主体の河川で、左岸側に最大幅で約 9.8mの古代の河川が確認されている。SD976 からは、墨書土器（59 点が報告。「仲成」「田庄」「仲」「足」「天」「入」「大」「奉」「氷」「床」「袴」「山」「方」「本」「前」「田」「有」「太」「木□」と「×」「五」と「五」「七」「七」と「七」と「□」「×」など）、転用硯、灯明具、木製品、銅製の巡方などが出土している。木製形代は斎串が３点あり、その他は曲物、挽物の盤、箸、棒状木製品、木簡などがある。

本遺跡については、「9 世紀前半が周辺地域の中心的な集落、中葉が物資の拠点的施設、後半～末が荘園関連施設で、いずれも在地豪族層の関与を示唆している」と指摘されている。

(2) 緒立Ｃ遺跡（新潟市（旧黒埼町）西区緒立流通）

土師器の甕を使用する人面土器が２点出土している。出土地点は低地部の木製品集中部近くで、長胴甕（図３の８、９世紀第２四半期～第３四半期）と小型甕（図３の９）がある。図３の９は、人面かどうか不確定であるが、鬢を描いていると推定されている。また、人面土器付近では斎串約 50 点とあわせて、人形と考えられる木製品や、木鏃（鏃形か）の形代がある。この他の木製品としては、編木鄕の可能性がある付札、曲物、折敷、火鑽臼、火鑽棒、斎串と考えられるような棒や箸も出土している。「岡本」「廣」「入」等の墨書土器もある。なお、土坑（SK529）から骨角製のサイコロ、グリットから帯金具（巡方）が出土している。

本遺跡については北東約 700mに位置している的場遺跡（新潟市西区的場流通）との関係が指摘されている。的場遺跡は８世紀前半～10 世紀に存続し、本遺跡よりやや先行して官が関与した漁業・物資管理の拠点と評価されている。この的場遺跡をさらに強い支配下に置くために設置されたのが本遺跡であると指摘されている。「緒立遺跡が役所本部で、的場遺跡が役所出先機関兼現場」と報告されている。

(3) 胎内市船戸桜田遺跡（胎内市（旧中条町）船戸）

人面土器は川跡から１点が出土している。土師器の小型甕（図３の 10）で、時期は８世紀末～9 世紀前葉とされる。顔は２面あり、A 面の目の下は揉上もしくは頬髭と考えられている。

川跡は蛇行しており、いくつもの調査区をまたいで確認され、幅は 5mから 14m以上の規模で、深さは 1.3～1.9mになる。この川跡からは、墨書土器（「村」「下」「上」「木」「王」）、転用硯、木製品などが出土している。木製品の中には斎串（7 点）、舟形（1 点）、馬形（1 点）の形代の他に、盤や曲物、付木、檜扇、下駄、棒状・箸状木製品などが確認されている。人面土器と斎串２点が同時期である。

本遺跡の周辺に所在する蔵ノ坪遺跡（東方約 400m）、船戸川崎遺跡（西方約 1.5km）、中倉遺跡（北西方向約 3.2km）との関連性が指摘されている。船戸川崎遺跡では斎串（29 点）、人形（4 点）、馬形（3 点）が確認され、中倉遺跡でも斎串（5 点）、馬形（1 点）があり、いくつかの祭祀場が存在していた可能性がある。

蔵ノ坪遺跡の報告書では「蔵ノ坪遺跡は当初（8 世紀後葉～9 世紀初頭）「律令的生産構造」の一村落である。この段階では郡司層レベルで推進されていたであろう。Ⅱ期（9 世紀後葉）段階では国衙支配が強まり、立地的に陸と水系の結節地にある蔵ノ坪遺跡、船戸桜田遺跡、船戸川崎遺跡が周辺の物資集積に関わる津施設としての役割を担っていた」と記載されており、本遺跡の性格について触れている。

６　まとめ

このように、北陸道（越前国、加賀国、能登国、越中国、越後国）において、人面土器は 21 遺跡から 62 点が確認できる。時期については、越中国の埴生南遺跡（図３の３）が７世紀末～8 世紀前半とされ、8 世紀末から 9 世紀初頭にかけて増加し、9 世紀代が多い。その後、9 世紀末まで確認できる。出土遺構は、溝や川跡、自然流路、低地部、道路側溝など水と関わりが強く、主に祓の行為で使用された痕跡と考えられる。

また、越中国では幅 2～7m程度の溝などを使用している場合が多かったが、周辺諸国では、幅 10mを超えるような大規模な川跡等で祭祀を行っている傾向があるようだ。また、加賀国の若松遺跡（図１の 17）からは掘立柱建物近くのピットから出土する事例があり、建物の祭祀に関わるかもしれない。

使用する土器は、土師器の小型甕、長胴甕、鍋、鉢などや須恵器の杯を使用している。このうち、土師器小型甕が最も多く、全体の72.6%を占める。口径は13cm台が最多で、最小は8cm台、最大は19cm台になる。次に多いの土師器長胴甕で14.5%、越前国以外で出土しており、地域で使用される土器の特徴でもある。9世紀後半に多く使用される傾向がある。須恵器杯は6.5%に過ぎない。土師器の小型甕を使用するのは都城の祭祀専用土器の影響によると考えられる。その他の特徴的な土器としては、能登国の森本C遺跡の土師器鉢(図1の21)を使用した土器である。顔は倒置に描かれ、底部には「中山寺」の墨書がある。また、越中国の南太閤山Ⅰ遺跡では、都城の壺Bを模倣した土器(図3の3)が出土し、これには顔がない。

ちなみに、以前筆者が越中国などで確認できると考えている「顔のない人面土器」が、越前国や加賀国でも出土しているようである(図1の3、13、19、20、図2の27、32～34、36、図3の3、12、13)。北陸道では数少ないながら人面土器の出土事例が増えており、祭祀の主体者などが人面土器に使用する器について理解していることを物語っているのかもしれない。

使用する土器の組み合わせは、ほぼ同サイズで同スタイルの土師器の小型甕もしくは長胴甕、須恵器杯を用いる場合や、土師器小型甕と長胴甕、土師器小型甕と須恵器杯のように大小の土器をセットで使用するケースが考えられる。これに木製形代が伴う場合が多い。また、越中国では木製形代以外に鮓、発火具、容器、服飾具、紡織具などが出土することがあり、同様のことが周辺諸国でも確認できる。共通性があるようだ。さらに、文字墨書土器が出土する場合がほとんどで、人面土器との関係については課題である。

描かれる顔の数は、1面が4点、2面が10点、3面が8点、4面が7点と、2面の土器が多い。顔の構成要素は、顔の輪郭、頭髪、眉毛、目、目玉、まつ毛、眉間、鼻、鼻穴、人中、口、舌、歯、耳、口髭、顎髭、頬髭、髷もしくは烏帽子などがある。顔全体の様子がわかる顔を分析すると、眉毛、目、目玉、鼻、口を描く場合がほとんどで、都城の人面土器の主要パーツと一致する(4)。次に髭や耳、顔の輪郭を描くことが見られる。特に髭は都城では主要パーツとされていないが、北陸道諸国においては、口、顎、頬髭のどこかの部分を描く割合が高く、髭は地域において、顔を構成する主要な部分と考えられる。

祭祀の背景については、公的施設などの存在が考えられる。筆者は、越中国では主に国府や郡家が関わっていると考えている。周辺諸国においては、能登国府や郡役所の関係が想定され同様の場合もあるが、津、荘園、寺院、あるいは交通路などを背景にした事例もあり、幅広い祭祀の主体者が想定される。

今回は、北陸道の人面土器に触れたが、もう一つの代表的な祭祀道具として人形などの木製形代がある。今後は、本稿で取り上げた人面土器の様相等を踏まえ、木製形代との関係について検討していきたい。

注

(1) 堀沢祐一2013「古代越中国の人面墨書土器について」『高岡市万葉歴史館紀要第23号』1-13頁
堀沢祐一2018「諸国での人面墨書土器出土状況について」『富山市の遺跡物語№19』38-44頁

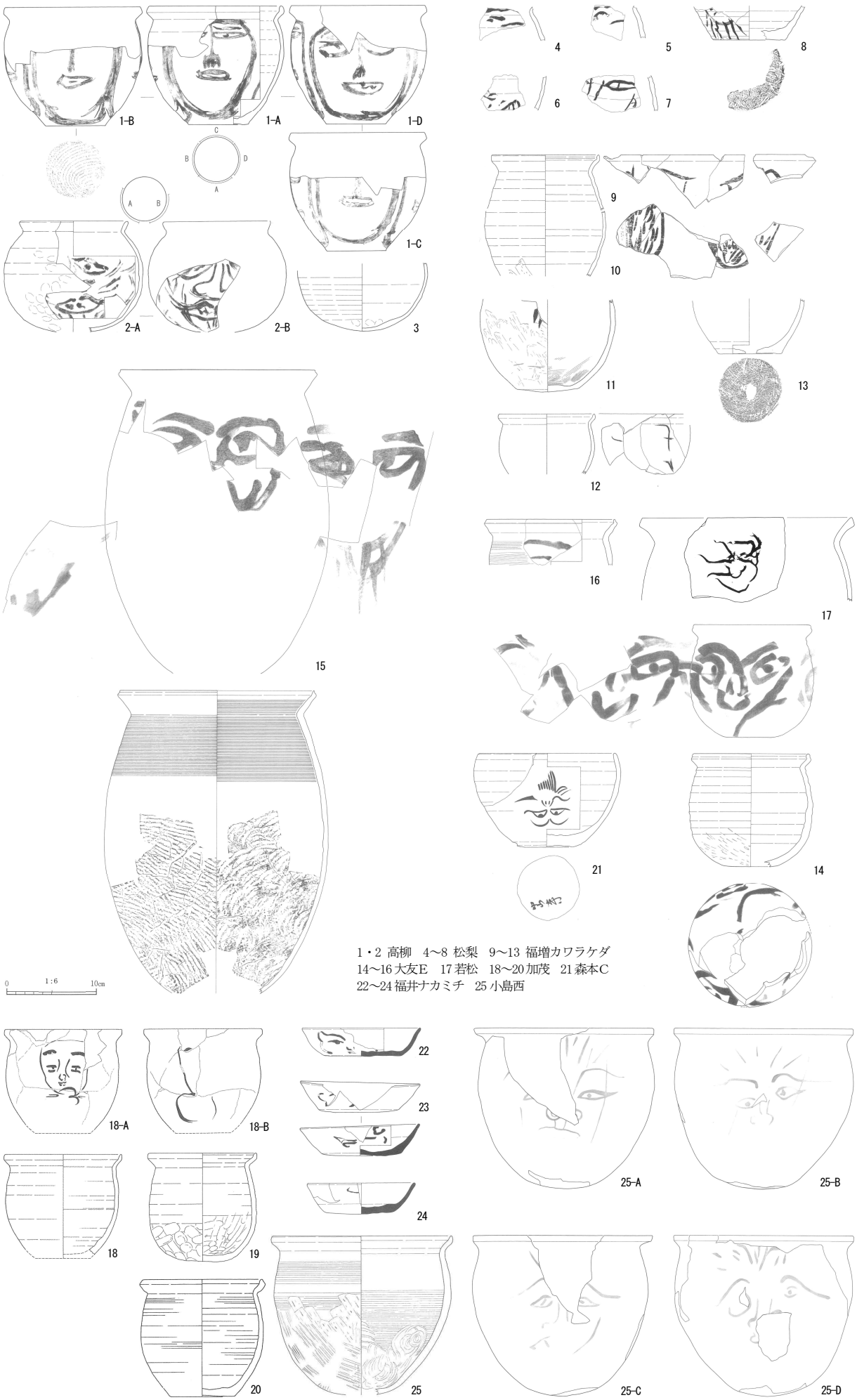
(2) 堀沢祐一2024「越中国の古代祭祀」『月刊考古ジャーナル№801』10-15頁

(3) 令和5年9月16日～12月10日に金沢市埋蔵文化財センターで開催されていた企画展「加賀の古代津港」に、金沢市南新保C遺跡から出土した人面土器(平安時代・土師器小型甕)が展示されていた。これを含めると加賀国では6遺跡から14点が確認できる。確実に人面土器とされる土器は9点になる。

(4) 上村和直1994「都城出土人面土器に関する二、三の問題」『文化財学論集』723-734頁

主な文献

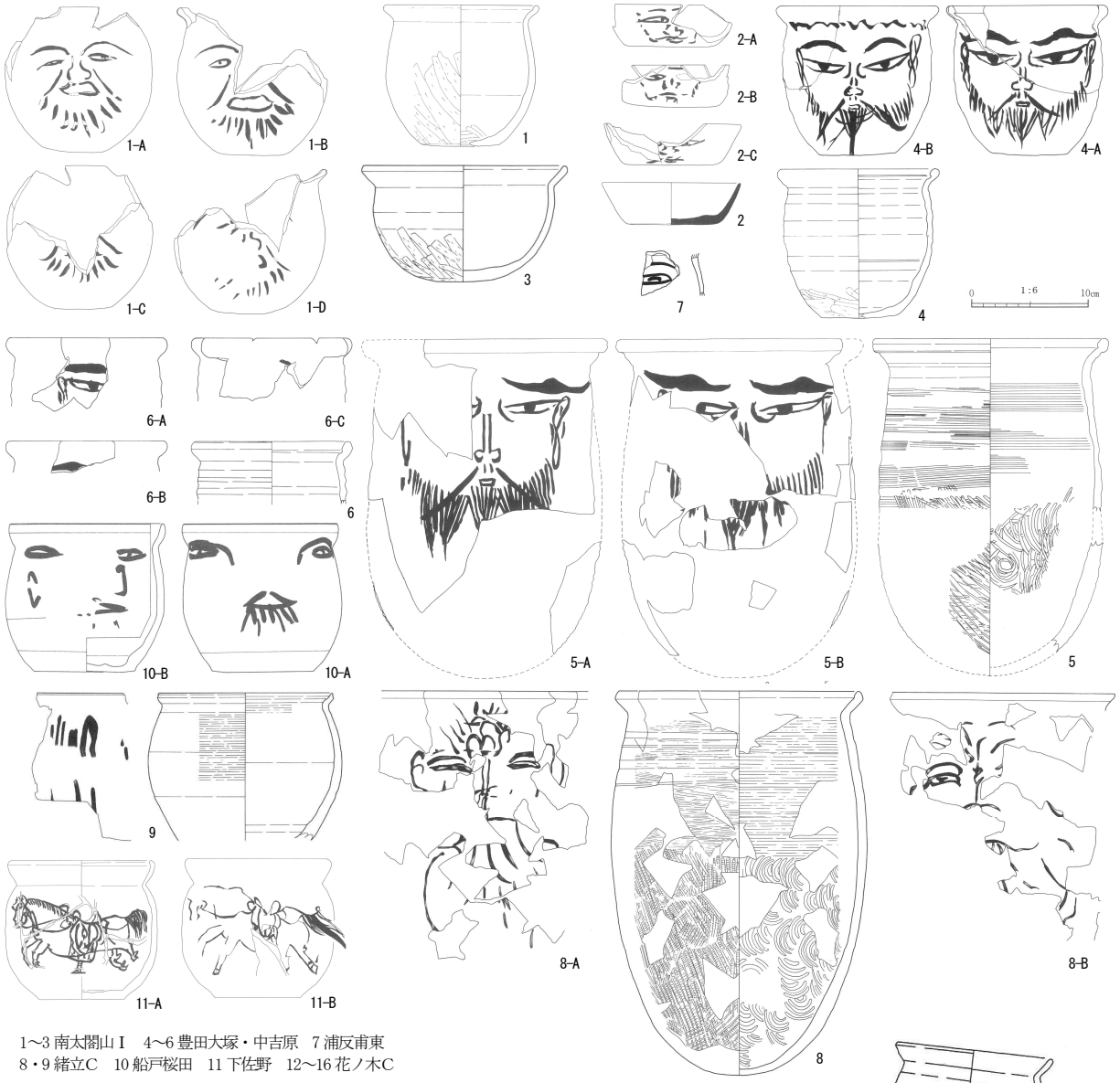
石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2008『七尾市小島西遺跡』
石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2009『津幡町加茂遺跡Ⅰ』
石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2008『宝達志水町森本C遺跡』
石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター 2016『金沢市大友A遺跡 大友E遺跡 直江西遺跡 直江北遺跡』
石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター 2017『羽咋郡志賀町福井ナカミチ遺跡』
石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター 2018『津幡町加茂遺跡 加茂窯跡群』
石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター 2021『津幡町加茂遺跡Ⅱ』
石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター 2023『津幡町加茂遺跡Ⅴ』
石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター 2023『小松市松梨遺跡』
大島町教育委員会 1995『富山県大島町北高木遺跡発掘調査報告書』
小矢部市教育委員会 1993『平成4年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報』
金沢市・金沢市埋蔵文化財センター 2006『石川県金沢市福増カワラケダ遺跡Ⅱ』
金沢市・金沢市埋蔵文化財センター 2004『石川県金沢市若松遺跡』
金沢市・金沢市埋蔵文化財センター 2009『石川県金沢市田上南遺跡Ⅱ』
金沢市・金沢市埋蔵文化財センター 2016『石川県金沢市大友E遺跡』
金沢市・金沢市埋蔵文化財センター 2021『石川県金沢市大友E遺跡』
黒埼町教育委員会 1994『緒立C遺跡発掘調査報告書』
(公財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2015『出来田南遺跡発掘調査報告』
(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2012『水上遺跡 赤井南遺跡 安吉遺跡 棚田遺跡 本江大坪Ⅰ遺跡』 **高岡市教育委員会** 2012『石名瀬A遺跡調査報告』
津幡町教育委員会 2007『加茂・加茂窯寺遺跡－第1～12調査区の詳細分布調査概要－』
津幡町教育委員会 2009『加茂・加茂窯寺遺跡 詳細分布調査(第1～14調査区)発掘調査報告書』
津幡町教育委員会 2012『加茂遺跡 詳細分布調査(第1～21調査区)発掘調査報告書』
富山県教育委員会 1985『七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘報告概要(3)南太閤山Ⅰ遺跡』
富山県埋蔵文化財センター 2011『富山県高岡市下佐野遺跡発掘調査報告書』
富山県埋蔵文化財センター 2014『北高木遺跡出土品集』
富山市教育委員会 1998『富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要』
中条町教育委員会 1999『新潟県北蒲原郡中条町中倉遺跡3次』
中条町教育委員会 2001『新潟県北蒲原郡中条町船戸桜田遺跡2次』
中条町教育委員会 2002『新潟県北蒲原郡中条町船戸桜田遺跡4・5次 船戸川崎遺跡6次』
中条町教育委員会 2002『新潟県北蒲原郡中条町船戸川崎遺跡4次』
新潟県教育委員会 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2002『蔵ノ坪遺跡』
新潟県長岡市教育委員会 2016『浦反甫東遺跡』
福井県教育庁埋蔵文化財センター 2021『高柳遺跡2』
堀沢祐一 2008「富山市花ノ木C遺跡の祭祀具について」『富山市考古資料館報№45』



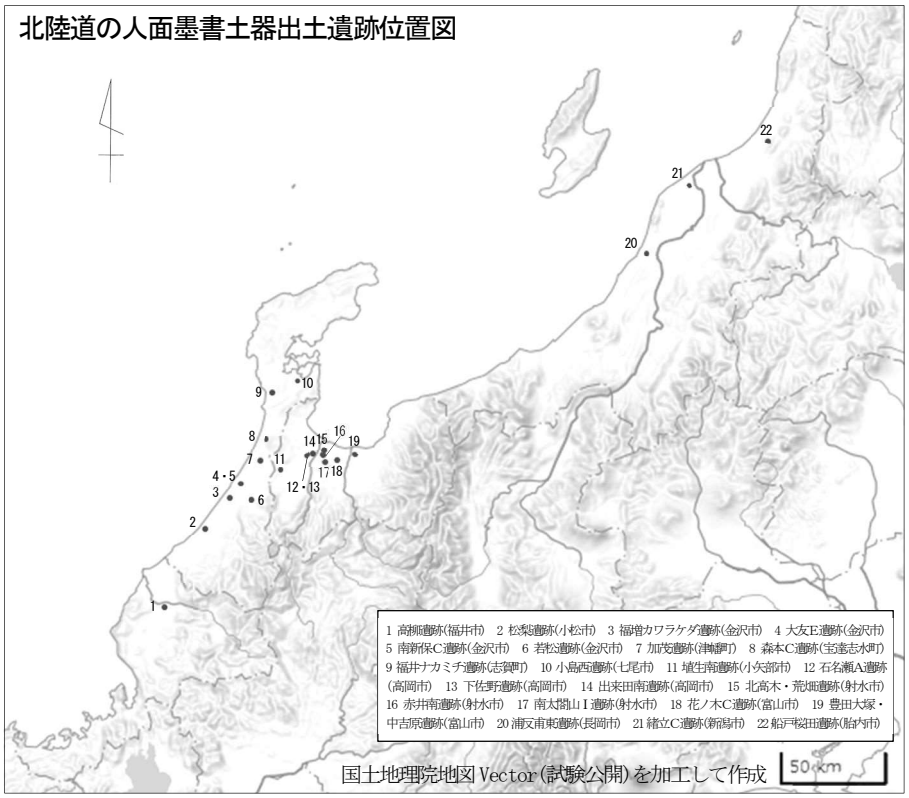
1・2 高柳　4～8 松梨　9～13 福増カワラケダ
14～16 大友E　17 若松　18～20 加茂　21 森本C
22～24 福井ナカミチ　25 小島西

図１　越前国・加賀国・能登国(1)の人面墨書土器（1：6）

図２　能登国(2)・越中国(1)の人面墨書土器（1：6）



1～3 南太閤山Ⅰ　4～6 豊田大塚・中吉原　7 浦反甫東
8・9 緒立C　10 船戸桜田　11 下佐野　12～16 花ノ木C



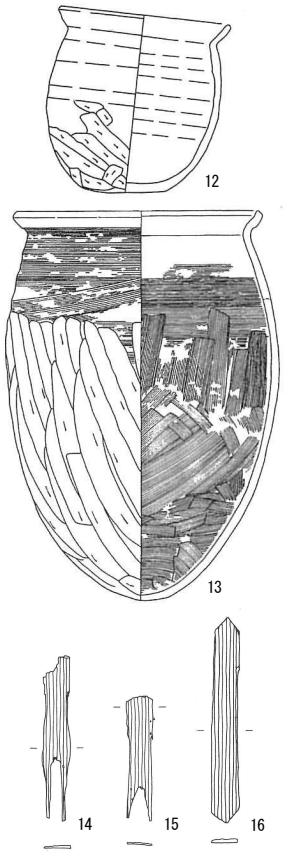


図3　越中国(2)・越後国の人面墨書土器等（1：6）